

好相行の体験

三千院門跡門主 堀 澤 祖 門

一 入山の動機

皆さん、こんにちは。好相行についての話はわりに簡単なので、その前にどうして私が坊さんになったのか、そういう話からしようと思います。

私の小学生時代には、日本はいつも戦争をしていました。日本は軍国主義の時代でした。ですから、私たちも軍国少年として成長してきたわけです。昭和二十年、これは日本が戦争に負けた年ですが、その年の四月に私は海軍兵学校という海軍の将校を養成する学校に入っただけです。しかしその八月に戦争は終わってしまいました。

海軍が解体されてしまいましたので私たちは元の旧制中学校に復学したんです。旧制の中学校というのは五年ありまして、わたしは四年の時に兵学校に行ったので結局その四年生に戻ったわけです。戦時中は中学生以上はみな学業を止めて軍需産業の工場などで勤労奉仕をさせられていましたから、この残りの一年半ほどが、私たちが中学生として学生生活を送ることができた時なんです。さて、旧制の中学校を終えるとその上に旧制の高等学校というものがあります。この旧制高校というものは二つの県に一つぐらいしかなかったので入学は大変難しかったです。

それでも五年生の時に私は幸いに新潟高校に入ることが出来ました。

ここは一年生だけは全寮制だったんです。それで全寮での入寮式が済んでから、各自の寮に帰って上級生との自己紹介の挨拶がありました。それが終わった後、寮長がこういうことを言い出したんです、「諸君は何のためにこの学校に入ってきたのか、その考えを聞きたい」と。上級生にそういうふうに言われるとなかなか答えにくいんです。二、三人指名されて答えたんですが、もちろん不十分だったのでしょう。寮長は、「もう結構だ」と、「そんな答えを聞くつもりで出した質問じゃなかったんだ」と話したのが「再誕」という話なんです。再び誕生するという再誕です。

旧制高校というのは、今の高校三年生と大学一・二年の三年間に当たる年齢なんです。だから、ちょうど子供から大人になる過渡期という非常に重要な時期なんです。「諸君は今までは子供で、両親などにサポートされながら成長してきた。身体も大きくなつたし、知識もそれ相應に増えただろうけど、それらはみんな借り物だったんだ。これから本当の自分の人生を生きていくためには、そんな借り物は何の役にも立たない。どうしても自分自身で自分を産み直すことが必要になってくるんだ」と言うわけですね。

産み直すといっても男ですから肉体を産み直すことはできません。それは内面的・内容的に自分を産み直させてことなんです。自覚的にといいましょか。独立独歩できる人間というんでしょかね。その時、寮長が先輩として人生のことを熱意をこめて諄々と語られたことに私は衝撃を受けたんです。自分の人生には自分が全責任を負うものだということ、見せかけではない真実の人生をどこまでも探し求めていくべきだということを熱く語ってくれたのです。わたしは田舎の中学から出て来ましたが、こんな話は生まれて初めて聞いたのでびっくり仰天しましたね。それこそ青天の霹靂でしたね。

これからは再誕するために、この学校の三年間がある。彼が言うには、学校へ行つて先生方の授業を聞くことも学生の仕事だが、今ここでは自分を産み直す「再誕」の作業が何よりも重要なんだ。これが自分の生涯を決めることになるんだからと。授業などはそれに比べれば二の次三の次のことなんだと。しかしながら、われわれが諸君を産み直すなんて出来るもんじゃない、諸君自身が自分自身で取り組むしかない問題なんだと。

そんな訳で、「再誕」しなくてはいけないが、どうしたらいいのか、それが解らない。先ずは圧倒的に知識が足りないわけだからと、先ず取り組んだ仕事が古典を読むこと、古今東西のあらゆる書物に学ぶしかないと思つて、人生論をはじめ文学、哲学、宗教と、とにかく何でも手当たり次第に読み出しましたね。当時は本が無かつたんですが、人から借りたり図書館から借り出したりして、夢中になつて読み始めましたね。

学校に行かなくてもいいというので、学校は平気で休みましたね。しかし学校の方は、授業で出席をとりますからね、人に頼むんですね、代返というやつです。一人が四、五人から頼まれるんですよ。その人が同じ声で何人もの返事をするんですね。しかし出席簿をつける先生も昔の高校生ですから、黙つて出席にしてくれるんです。その代わり寮ではお互いにハチマキ・タスキで本に食らいついて行つたという経験があります。

そんなふうに読書や議論をしながら結局三年過ぎましたが、三年経つて、それでは何が解つたかというのと、何も解らなかつたんです。つまり「再誕」、自分を産み直すつてことは、結局は自分とは何かということから始まるわけですね。あるいは人間とは一体何なのか、なぜ生きるのか。そういった人生問題がみな一つの線につながつてるんですね。ですから、簡単に答えが出るはずはないんです。先輩は三年間で結論を出せというふうに言いましたがね。もつとも、あの当時、この問題にぶつからなかつたら、全人生で、そんなチャンスはなかつたでしょうね。バカ正直で、純真だからこそ出来るんですね。まあ、たとえ答えが出なかつたとしても、一度は必死になつてそれに

ぶつかって、一年でも二年でも苦闘するというのは、人生の根本の問題を知るためには必要不可欠なことではないかなと思うんです。

しかし、この間にいろいろな哲学の概論書などを読みましたが、哲学書というのは結局、哲理、哲学を語るものでしょ。どこまでも頭の中の概念でできあがった世界なんですね。だからそれが実社会において、私が求めている生に向かって、活力のある助け舟になるとはかぎらない。残念ながら三年間いろんなことをやっているうちに、どうも哲学は冷たくて答えてくれないんじゃないか、というふうに哲学に対する信頼感をだんだん失ってしまったんです。

では何かと言ったら、宗教しかないんだけど、当時、昭和二十年代の前半ですが、あの当時の学生は仏教には全然関心を持っていなかったんですよ。宗教と言えばキリスト教でしたね。波多野精一の『基督教の起源』などがよく読まれていた頃です。私に年長の友人がいて、彼だけが仏教の概説書を読んできましたね。曾我量深とか金子大栄とかという人の本を読んできましたね。それを借りて読んだことがある。ですから、ある程度は、法然とか親鸞のことは読みかじっていたんです。

その中で「他力」という言葉が出てくる。これが解らなかった。なにぶん自己流の解釈だから、自力がダメだなんて言われたら、何もすることができなくなっちゃう。他力といっても他人の力としか思っていないませんでしたからね、阿弥陀仏の力だなどと思っていまさんからね。そんなことで、他力の問題でずいぶん迷いましたよ。

結論として三年経って、それじゃ再誕できたかと言えば、出来ませんでしたね。むしろ、いろんな知識を詰め込むことによって、かえって混乱するだけでした。でも再誕の問題だけは、頭にこびりついてしまっていた。三年経ったら大学に行かなければならない。ところが肝心の哲学への信頼感が無くなってしまっている。でどの学部に行

くべきが解らない。私たちは実は旧制度の最後なんです。あの頃の学生は旧制制度に非常に愛着をもっている。新制大学に行くのは嫌だという気持ちがあった。だから受験も一回きりの勝負だという気持ちでした。

しかし私は再誕の問題に深入りしすぎていたので、ふつうに受験勉強する気にならない。また行くべき方向が定まらない状態だったので、中学で非常に尊敬しておった恩師に相談したんです。すると君のところは財産はあるかって聞くんですね。その先生は素封家の息子でしたが長いこと結核に苦しんでいた時でした。それで財産はあるか使うわけですね。だから財産はあるかって聞かれたんでしょうね。有りませんと言ったら、そんなら自分の暮しを先ず確保することだね。その上で本当に好きなら生涯かけてもやれるじゃないかって言われましてね。私もなにぶん尊敬していた先生でしたから、そうですかと納得したわけです。

それで京大の経済学部を受けたところ幸か不幸か合格したんです。それで京大に入って教室へ通うわけですが、そこは田舎者で融通がきかないものですから、経済学部の学生だからと経済学の教室にしか行かんわけです。ところがどの先生も経済学の授業しかしてくれないんですね。これはまあ当たり前なんですけども、私にはどの教授の話の聞いていても、なんか遠い遠い話のような気がして、全然こっちの心に響いて来ないんです。一週間ぐらいはそれでも学校に通ったんですが、やはりどうしてもピンとこないんです。

高校時代に三年間も再誕問題に打ち込んだのでちょうどその疲れが出て来た頃なんです。ノイローゼにかかっているのと見た友人もいたように、他人から見たらそうも見えたのでしよう。そんなわけで学校に行くのもしんどかったから、ついに行かなくなっただけです。もうほとんど下宿でごろごろしていたんです。

わたしは五月の終わりに誕生日が来るんですが、その誕生日が来たんです。さすがにその日はちょっと深刻な気持ちになりました。学校の授業には出ない、経済学の本も開いて読もうとしない、一体こんなことでどうなるん

だろう、と先がまったく見えません。そのうえ経済的な面ではすべて両親の世話になっている。その両親は私の将来に期待しているからこそ送金してくれているんだ。そんなことを考えているとその夜に限ってどうしても眠れないんですよ。まるで頭の芯が凍ったような感じになりましたね。

ただただ時間をやりすごしている状態だったんです。ところがその真夜中に、不思議なことが起きたんです。『比叡山』という想念がいきなり頭に飛び込んで来たんですよ。エーなんで、なんで比叡山!! まったく理解できません。ぜんぜん関係がないんですから比叡山とは。むしろ法然・親鸞の方に親しみを感じていましたが、比叡山は全く頭にありませんでした。比叡山と高野山とか、最澄と空海とかの程度しか知っていなかったんですから。

そのうち気がついたら、頭の芯の水が溶けていたんです。なにぶん疲れ切っていましたからそのまま寝てしまいました。翌朝、眼を覚ました時に、はて昨夜なにか変なこと考えて寝たんだよな、今、頭にあるのかと思ったら、やはり、はつきりとあるんですね。これは比叡山に行かなきゃならないのかなってわけで、そのまま引かれるようにして、叡山電鉄の電車に乗ったんですよ。昭和二十五年でした。あの頃、まだ日本は食糧難で大変な時でした。受験するために京都の旅館に頼んでも、お客さんに「お米持っていますか」と聞くんです。それで米を持ってない人には、どんなにお金を出してもダメなんですよ。「食事を差し上げることができません」と。

そんな時でしたが八瀬のケーブルカーは動いていたんですね。私一人を乗せて時間通りに出ました。五月の末ですが、一雨降ったんでしょうね。一雨降ると比叡山は全山が霧につつまれます。そのひんやりと冷たい霧や草木の新緑が全身の細胞に沁み込み溶け込んでくるような感じなんです。歩いているうちに、なんとも気持ちよくなったことを憶えています。そんな気持ちの良さなどを感じたのは三年ぶりなんですよ。何しろ三年間は頭だけで考えていましたからね。感性というものを完全に無視していたんですね。その乾いた感性の細胞にひんやりした霧や新鮮な

緑が気持ちよく沁み込んで来たんでしょう。歩きながらとても気持ちよくなっていったことを覚えているんです。

そのままどん山の中に入っていくと大きなお堂に出来ました。東塔の大講堂だったんですが、その入口にローソクや線香を売っているお爺さんがいました。その時すでに、このまま京都に降りたくないという気持ちがありましてね、この山に泊めてくれる所はありませんかと聞いたら「ありませんね」と断られました。そこでお堂の中に入って仏像を見て出て来たところ、「学生さん、学生さん、あんたが中に入っている間に考えたんだけど、泊めてもらえるかもしれないから、そのお寺に行きなさい」と言って、ある寺を教えてくれたんです。

そして、その和尚さんに頼み込んで泊めて貰ったのが無動寺なんです。ここは天台宗の若い坊さんたちを集めて修行させている修行院でしたが、私がどうしても滞在したいならその中に入ってオプザーバーとしてやってみなさい、というわけで許されたんです。この人たちの修行は三か月間でしたがすでに二か月済んでいてあと一か月を残すだけでした。そこで私はこの人たちに交じって朝早くからの勤行や掃除作務など規則正しい生活が始まりました。そうした日々の中で毎朝白い行衣を着た僧たちが下の坂本から上がって来てここの諸堂を拜んでいる姿に出遭いました。

これは回峰行をしている僧たちで、中には千日回峰行を命がけてやっている僧もいるそうです。私は命がけて修行する坊さんというものに初めて出遭ったのです。その中に、葉上照澄さんという坊さんがいて、京大生ということで私を呼んでくれました。この人は大正大学の教授でしたが、日本が戦争に負けて、これからどうするか、日本の復興は教育からだと思ったそうですが、自分自身はふやけてしまっただけで教育することが出来ない。そんなことに悩んだ時、もともと寺の出身でしたから総本山の比叡山を訪ねたんだそうです。そこで千日回峰行中の和尚さんに出遭った。同じ年だと言うけれど、和尚さんは痩せているが眼光炯炯として光り輝いている。それに反して自分はこ

んなにふぬけて哀れな姿である、と大きなショックを受けたのだそうです。私でも回峰行をやれますかと訊いたら、すべて心が次第だと応えられたそうです。それから直ちにこの和尚の弟子になって回峰行を初めて、今、三年目で三百日目の行をしているとのことでした。

私は葉上さんからこの話を聞いて、自分の上に当てはめてみました。このまま山を下りて京大に戻ったところで問題の解決にはならない。それならばいつそ僧になって命がけの修行をしてみるか。そうでもしなければ再誕の問題は解決しないだろうと。そこで、それからじつくりと僧になることを考えて、ついに決意したのです。

そしてその叡南祖賢和尚の弟子となりました。出家してからですが、師匠によく言われていたことは「絵を描くな」ということでした。自分の頭の中で勝手に色んなことを考えることを「絵を描く」というんですが、すでに弟子になったんだから師匠にみんな任せなさいと。自分で絵を描くんじゃないと言われたんですけど、たった一つだけ絵を描いたんですよ。それは、いよいよ比叡山の坊さんでやっていくとなった時に師匠に尋ねたんです。

「せっかく比叡山で出家したんですから、この比叡山で一番オーソドックスな行をしたいと思いますが、それは何ですか」と。その時、師匠は少し考えてから答えました。「うん、そういえば有るんだよ。それは回峰行じゃなくて籠山行というものなんだ。」「その籠山行というのは比叡山の開祖の伝教大師が創られたもので、十二年間全く山を下りないで修行を続けるものなんだ。なにしろ伝教大師ご自身が定めた修行だからね。これが一番オーソドックスな修行だね。」「そういえばいま浄土院にお仕えしている侍真僧はすでに一期十二年を過ぎているんだが、後継者がいないのでお山の方が頼んでそのまま続けてもらっている状態なんだ。お前さんがその籠山行をやってくれるならこんなに有り難いことは無い。どうだね、やってみるかね」と仰ったんです。私は即座に「はい、ではそれをやらせて下さい」と答えて話が決まったんです。

二 好相行

十二年籠山行をするには前もってしなければならぬ行があります。それが好相行という行なんです。それは戒律を受けるためにやる行なんです。出家する時は誰でも得度受戒と言って、戒律を受けるのが決まりになっていますが、日本では受戒しても誰も守ろうとしません。一例が不飲酒戒です。戒律の中には当然、酒を飲むことは禁じられています。その得度式の後で祝宴を持ちます。その時、誰でも祝いの酒を飲むでしょう。つまり明らかに破戒しているわけです。ですから、十二年籠山行に入る時には、もう一度しっかり受戒し直す必要があるのです。

ところが伝教大師はこの受戒する時に厳しい条件を出しているんです。一般の受戒では人間の僧侶が戒師となつて戒律を授けるのですが、大師は十二年籠山行に限って非常に厳しい条件を付けたのです。それは人間の戒師ではなく、仏さまから直接受戒の可否を判定してもらふということなんです。これを好相行と言ひまして、仏の好相を感得することを条件としたのです。これを自誓受戒じせいじゅかいというんです。

どのようにしてこの好相行をするのかと言ひますと、場所は比叡山の浄土院の拝殿です。その拝殿の一面に白い幕を張つて区切ります。その正面に授戒の三聖という、真ん中に伝戒の和上としてお釈迦さま、その左右にそれをサポートする文殊菩薩と弥勒菩薩の三聖の大きな掛け軸を吊るすんです。その左右には一対の燭台を置いて昼夜に灯明を灯します。これは灯心に菜種油を注いで火を付けます。掛け軸の前には『三千仏名経』という三冊の経本を置きます。過去の千仏・現在の千仏・未来の千仏が三冊の経本になってましてね、その中の一冊、まず過去の千仏の経本から開いて一仏ずつの名前を唱えながら五体投地の礼拝をするんです。

その経本の前には一枚の座布団が置かれ、その上に坐布という麻の布を敷きます。そして経本の手前には香炉を

置き、その左に散華のための櫛しきみの葉を籠に入れておき、その右には打ち鳴らす磬けいを置きます。そうして行者はまず座布団の上に坐つて焼香し、散華し、それから磬を打つてから、最初の仏の名前を「なーむ……」と唱えながら合掌して立ち上がり、唱えながら坐布の手前に右膝、左膝と着きながら体を倒して、坐布の前の方に両手の表を着いてその真ん中に額を着けて礼拝し「・・ぶつー」と唱えます。こうして一礼が終わつたら、また焼香・散華・打だ磬けいして次の仏の名前を唱えながら立ち上がって合掌し、五体を地に倒して礼拝するという五体投地を一日に三千仏に對して三千回を繰り返すわけなんです。

好相行に入ったらその礼拝行は、不断・不眠・不臥となります。眠らず・横にならず・中断せず、という条件が付くんです。そしてその期間は？ということですが、好相を感得するまで、ということになります。好相とは仏さまに関する好き相よですが、実際にははっきりと仏を見るまでは合格しません。これを判定する人は侍真僧（大師にお仕える僧）である現役の籠山比丘なんです。彼はすでに好相を得た体験者ですから、その人の判定で「よし」と出ない限りは合格になりません。

この間は三度の食事と用便以外には道場を出ることも許されななんです。休憩のために自分の部屋に入るなどは固くご法度です。だから行中は自分の部屋には鍵がかけられます。

さて、實際の話ですが、私はこの三千回の礼拝をするのにどうしたら良いかと考えました。ただ無方針に礼拝をしているのは容易ではないと思つたからなんです。そこで考えたのが山登りの方法です。山を登るとき、まず一目から登って次第に高く登っていく要領です。一週間くらいかけて山頂に到着する。その時、山頂で仏さまが現れるんだらうと。

そんなふうに考えて山登りを開始します。三日、四日と次第に力を込めながら仏名を唱えていき、一週間目の真

夜中に全力を出し切って頂上に着く。その時、仏に出遭えるんだと。しかし、こちらの期待に反して何の変化も起こりません。ほの暗い灯心油の光りに照らされて道場はうす暗く静まり返っているだけなんです。それで、なんだか裏切られたような感じがして、少々落ち込んでしまします。しかしながら他に方法が無いので、やはり同じことを繰り返すんです。しかし、結果はやはり同じことです。こんなことをそれでも何度も何度も繰り返して挑戦したんです。他に仕様がなかったからなんです。

日中は暑くてひどく汗をかきます。そのため体中が汗疹あせもだらけになってしまふんです。それにはベビーパウダーなんかを使ったりしました。三千回の礼拝は大変な重労働なんです。立ったり坐ったりする時に足が着いている真黒な床板がいつの間にか両足の形に真っ白に削り取られたようになるんです。礼拝する時に坐布の上に両手の表を付いて体を起こしますが、その手の指の節が硬く節くれだつて来ます。初め一日に正確に三千回の礼拝が出来ていたものが、何時しか疲れのために三千回を満みずることが出来なくなつて、その回数を翌日に残してしまふことがしよつちゅうありましたね。

肉体的な問題は初めから覚悟していましたが、一か月二か月と礼拝を続けているうちに、仏さまが出て来てくれるなどと期待することがほとんど出来なくなつてしまふんです。何度も何度も期待が裏切られていくうちに、そんなふうに期待することすら出来なくなつてしまふんです。そうなると果たして好相などがあるのかという疑問すら出て来て、信じがたくなつてしまふんですね。肉体的な過重はともかくとして、心理的にこういう状態になると、一礼、一礼と礼拝すること自体に力が入らなくなつてしまふんです。ですから心理的な大きな危機と言えるでしょう。

それから睡眠不足は最大の難敵です。不眠と言っても、全く眠らなかつたら疲労困憊して前後不覚となり、それ

では礼拝すら出来なくなってしまうです。それで、行中は道場の隅に縄床じょうしどというものだけは置いてあります。これは床の部分が縄で編みである坐禅用の椅子のことです。行中、前後不覚になったら行者はこの縄床に腰を下ろすことだけが許されているんです。しかし、左右も後ろも垂直な仕切りの中のこと、行者は縄床に坐っても半時間以上も坐り続けることが出来ません。寒さと体の痛さで自然に目が覚めてしまうんです。その寒さを解消するためには礼拝をして体を温めるほかないんです。

それからもう一つ話しておくことが有ります。それは明るさと暗さで意識状態に及ぼす影響が大きく変わるということなんです。たとえば夕方、外界が暗くなってくると行者の意識状態も暗くなるのです。明るい時はどんなに疲れていても意識はかなりしっかりとしています。だから一礼、一礼を何とか続けることが出来るんです。しかし、いったん外界が暗くなってくると条件は一変します。意識状態が朦朧もうろうとしてくるんです。昼の礼拝では立ち上がる時、両手の表で軽く押すだけで身体を持ち上げることが出来るのですが、それが夜も遅くなってくると、身体を起こすのに両手の掌の方を使って踏ん張らないと立ち上がることが出来なくなるんです。

真夜中ごろになると、自分が合掌して立っているのに、自分がいま何をしているのか解らなくなってしまうことがよくあるんです。一体何をしているのか判断ができなくなるんです。それで身体を動かしたり、つねったりして、ようやく今、礼拝行の最中なんだと気づいたりするんです。礼拝した形のままで時間が過ぎ去っていたこともありましたね。

いずれにしてもこのような時間を経ることが必要なんでしょう。まだ判断力のある間はあれやこれやと頭で考えてしまいます。あれこれ期待できる間は期待する心が働いてしまうんです。粗い生地は冷たい川の水の中に入れて晒あびすか、砧きぬたで叩いて生地を和らげるかが必要です。行というものも私たちの心や体にこのような働きを加えるため

のものなのかも知れませんね。

こういう礼拝の状態が一月過ぎ、二月過ぎ、三月も過ぎようとした頃なんです。ある日の真夜中、縄床に坐つて居眠りしていた時に、いきなり仏さまが現れたんです。驚いて眼を開けました。しかし、その同じ仏さまが依然として見えているんですね。目を閉じてても眼を開いても同じ仏さまを拝むことが出来たんです。「開目して仏を拝み、閉目して仏を拝む」ことが好相の条件の一つなんです。

その仏は前方四、五メートルの先に、しかも二メートルくらいの高さに立っていました。全身は一メートルほどで、しっかりとこちらを見ているんです。ちょうど極彩色の仏画から抜け出て来たような感じなんです。周囲は暗闇なのにその仏だけがはっきりと見えていました。しかも細かな衣類の動きまでも感じられたんです。仏さまがただ黙つて私を見下ろしていられるお姿を見ているうちに、いきなり「お釈迦さまだ！」と気づきました。その途端、「南無釈迦牟尼仏！」という声が私の腹の底からとめどなく湧き上がって来て、私はただ一心に「南無釈迦牟尼仏！」と唱え続けていたんです。感動の余り涙が溢れ出て止まらず、それが汗とともに顔を流れ落ちていくのが解りました。

ただ一心に唱え続けていますと、やがて仏さまの手から一本の紐が降りて来て私の腰を巻いてまた仏さまの手元に戻って行くのです。仏さまは瞬きもせず私を見つめたまま両手に紐を持つて静かに後退なさるのです。その瞬間、腰が引かれると感じたまま、すると紐は解けて、仏さまだけが静かに闇の中へと消えて行かれたんです。私は感動と緊張のためにしばらくは金縛りにあつたように動くことが出来ませんでした。

やがて、道場の状態が元のままに戻りました。正面の掛け軸の左右に一对の燭台があり、灯心油が依然としてほのかに灯り続けていました。その灯明にうす暗く照らし出された道場には何の変化もありませんでした。私だけが

大きな激浪にさらされただけで、他は何ごとくも変わっていません。

私は坐ったまま「ああ、これが好相なんだなあ」と感じ入りながら、そういう時には夜昼を問わずただちに師僧の許におもむきすべてを報告することになっていましたので、ゆつくりと立ち上がり師僧に報告しに行きました。

師僧は起き上がって、私の体験を一部始終丁寧に聴いて下さいました。そして、いくつかの質問をされた上で、「結構です。それが好相です。今は夜中なので、朝になったら私がお山を下りて天台座主に報告に行きましょう。その上で猥下からご承認を戴いたうえで初めて好相行が終わるのです。それまでは今までと同じように礼拝行を続けて下さい。長いことご苦労さんでした。」と仰ってくださいました。

私はこの師僧からの判定の言葉を聞いて初めて心から安心したんです。それまでは、これは好相に間違いないと自分では思っていますが、やはり権威ある第三者の承認の言葉を聞いて初めて深く納得するんですね。仏法には昔から「伝法」ということがあって、正しい師から正しく法を伝えるという事が格別大事にされて来ましたが、今、私はこの体験をしてその伝法ということの本当の意味を身をもって知らされた思いがしたのです。